

平成23年度  
入学試験問題

国 語

2月1日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校



□ 一 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) 重要な外交セイサクを發表する。
- (2) あの人は私の命のオンジンである。
- (3) 思いがけないサイナンにあう。
- (4) 新年度の予算をケントウする。
- (5) 私はあなたの意見をシジする。
- (6) ゴールのスンゼンでぬかれた。
- (7) あの人はとてもドキョウのある人だ。
- (8) 戦争はトウトイ人命をうばう。
- (9) 兄はナミはずれて背が高い。
- (10) ピアノのレッスン料を先生にオサめる。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

法隆寺ほうりゅうじを始めとする古い建物が今も残っているのは、当時の大工の技術がすぐれていたからでもありますが材料がよかったというのも大きな理由です。とくにヒノキA(檜)は最高です。ヒノキだから今までもって|||||きた。丈夫じょうぶで腐りくさにくいという点ではヒノキが一番です。

木は、使う場所によって、その性質がより生きてくる。1、スギ(杉)は木造船を作る時によく利用される。また、マキ(榎)は水をよくはじくから風呂ふろ桶おけにいい。関東ではヒノキ風呂が最上といわれていますが、関西ではマキの風呂を喜びますね。こういう使い分けも木の文化です。

ケヤキ(欒)もありますね。とくに最近の人たちはケヤキを喜ぶようです。2、ケヤキは建築部材として使うには少し難しいところがある。山に生えているケヤキを倒しても、すぐに使ったら困ったことになります。

木によっては芯しんのほうの赤身と、外側の白太しらたの部分がはっきりしているものがあるのですが、ケヤキもそのひとつで、白太がついた

ままのケヤキはちょっと使いにくい。白太の部分はすぐに腐ってぼろぼろになるからです。3、ケヤキを使うなら一〇年以上寝かせて置いて、白太の部分は腐らせてしまい、残った赤身の部分だけを使うようにしないといけない。

4、ケヤキは水に弱い。柱に使うと下から水を吸い上げてしまつて中から腐る。ひどい時は中が空洞くうどうになってしまつてしまうこともあります。だから、箆たんすや机のような家具に使うのならいいのですが、建築材料にはあまり適さない。ひとくちに木を使うと言っても、① それぞれの木の性質に適した使い方を知らない、木を生かして使うことができないのです。

ペンキを塗ぬつて木の肌はだを隠かくしてしまうのも文化なら、木の肌をそのまま見せるのも文化。日本の木の文化はもちろん、A 者のほうですが、ヒノキは木肌も美しいものです。また、独特の香りもある。そういうヒノキの特長を生かして、お寺や神社を建てていたのですが、残念なことにヒノキはだんだん減ってきています。値段の安い海外の木材Bに押おされている。山で仕事をする人たちも少なくなつてきて、山自体も荒あれてきている。

お寺や神社は、日本の伝統や文化と深いところで結びついたものでもありますし、やはり、日本の建物には日本のヒノキを使うほうがいいと思うのですが、そのヒノキが手に入りにくくなつてい



木の良さを生かしていない。木の文化からはずれてしまっている。無駄むだを省くことばかり考えないで、無駄を生かすことをもう一度考えてもいい時期じゃないかと思えますね。

(松浦昭次『宮大工千年の知恵』)

問一 〓 線A「もつ」、B「押す」のここでの意味と同じ意味

を持つものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「もつ」

ア、遠足におやつをもつていく。

イ、母はいつも弟の肩かたをもつ。

ウ、寝不足ねぶそくをすると体がもたないよ。

エ、幼いころのけんかを根にもつ。

B 「押す」

ア、このことからおすと、あれが原因だ。

イ、車をおして、坂道を上っていった。

ウ、田中君を生徒会の会長におす。

エ、試合は今のところ相手チームがおしている。

問二

1

4

れ選び、記号で答えなさい。

ア、また イ、しかし ウ、だから エ、たとえば

問三 ——— 線①とありますが、次のうち「木の性質」に適した使

い方として正しくないものをすべて選びなさい。

ア、ケヤキの大木を家の大黒柱として用いる。

イ、ケヤキの木目を生かした本棚ほんだなを作る。

ウ、ケヤキを材とした大きな帆船はんせんを作る。

エ、ヒノキを用い、香り高い風呂桶を作る。

オ、ヒノキを用いて寺の本堂を建てる。

問四 ——— A にあてはまる漢字一字を答えなさい。

問五 ——— B には体の一部分を表す言葉が入ります。その言葉

をひらがなで答えなさい。

問六 ——— 線②とはどのような心配ですか。次の中から適当なも

のを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、国有林に眠っているようなヒノキを使えるようになっても、

加工技術ばかりにたより、ヒノキの良さを殺してしまうの  
ではないかという心配。

イ、国有林に眠っているようなヒノキを使えるようになっても、  
昔と同じような品質のものになるかどうかはわからないと  
いう心配。

ウ、国有林に眠っているようなヒノキを使えるようになっても、  
大工としての技術が追いつかず、昔のように良い製品が作  
れなくなるのではないかという心配。

エ、国有林に眠っているようなヒノキを使えるようになっても、  
外国産の安いヒノキに押されて、日本の林業自体がおとろ  
えてしまうのではないかという心配。

問七 ——— 線③について、

1. これはどのような木のことを言うのですか。二十字以内で  
答えなさい。

2. 筆者はこのような木についてどのように考えていますか。  
本文中より十五字でぬき出しなさい。

問八 ——— 線④「こうなれば」とありますが、木がどのような

ることを言っているのですか。木を伐り倒してからの過程を  
ふまえた上で五十字前後で説明しなさい。

問九 次のうち、本文の内容として正しいものは○、正しくないも

のは×を答えなさい。

ア、日本の伝統文化と深く結びついた寺社が今もきれいに残っ  
ているのは、良い木材とそれを生かす大工の技術のおかげ  
である。

イ、日本では、古来より様々な木材をその性質によって使い分  
け、それぞれの良さを生かす木の文化が発達してきた。

ウ、良い木材が少なくなった現代の日本では大工の技術も生か  
しようがなく、今後寺社建築はできない。

エ、ヒノキは木材として大変すぐれた性質を持っているが、花  
粉のもたらす害によりその数を減らされている。

オ、今の時代は木材を加工することを手間だと思い、その無駄  
を省こうと海外から加工済みの木材を輸入している。

カ、無駄な時間をなくす現代の木材の運搬方法は最終的に日本  
古来の木の文化をそくなってしまいうことになる。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

\* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

「ぼく」(白石誓)は、チーム・オッジに所属する自転車ロードレースの選手で、今は、六日間にわたって行われるレース、「ツール・ド・ジャポン」の最中である。「ぼく」は、ふだんはチームのアシスト(空気抵抗を減らすための風よけなどをして、エースを勝たせるために力を尽くす役割)を務めているが、思いがけないことから現在、個人総合一位にたっている。

流れはオッジに向いていた。その瞬間までは。

ふいに、石尾さんがペダルを止めた。手をあげて合図をしながら、集団から横にずれるように抜け出す。

メカトラブルのサインだ。ぼくは息を呑んだ。集団にも動揺が(広がる)たのがわかる。

後ろを振り返る。オッジのチームカーの前には、三台、別のチームの車が走っている。

一瞬、迷った。ぼくはどうすべきなのだろう。

一緒に止まれば、先頭集団からは置いて行かれてしまう。総合成績を守るためには、ここで止まるべきではない。

だが、アシストなら。

アシストとして働くなら、ここでは一緒に止まり、彼をサポートして、先頭集団に戻すべきだ。

石尾さんと目があった。

① もし、ここで、彼が「行け」と言うのなら。

だが、彼はぐいっと指を自分の方に(曲げる)た。戻ってこいのサインだ。

ペダルから、シューズを外し、ぼくは地べたに足を(つく)た。先頭集団は、好機とばかりに速度を上げ、先に進んでいく。

「パンクだ」

石尾さんは( )言った。

やっとチームカーが上がってくる。メカニックたちが、(積む)だ予備の自転車を下ろそうとする。それを見て石尾さんは叫んだ。

「バイクは替えたくない。後輪だけ替えてくれ」

時間のロスを重視するなら、自転車を替えた方が早い。だが、予備の自転車はメインほど丁寧にポジションニングの調節をしていない。自転車を替えることで、そのあとの走りに悪影響が出ることもある。

メカニックがホイールを替えた。

石尾さんは、また自転車にまたがった。メカニックが彼の背中を押す。ぼくも走り出した。

ロスした時間は四十秒ほど。だが、山岳でのこの四十秒は命取りだ。

先頭集団の姿は先の方に見えた。なんとしてもあそこまで追いつかなくてはならない。

少なくとも石尾さんだけでも。

そう思った瞬間、ふいに霧が晴れた。思考がクリアになる。

ぼくは、石尾さんの前に出た。

シフトアップをし、ペダルに力を込める。

② ぼくのゴールは、ゴールゲートではない。あの集団なのだ。

振り返って叫ぶ。

※ 「引きます。ついてきてください」

石尾さんは頷いた。

平坦ほどではないとはいえ、山岳でもアシストが前を引けば、後ろの選手は楽に走ることができる。力を温存することができる。

もし、ぼくがゴールまで行く力をすべて使って、あの集団まで行けば。

そう、それがぼくの役目だ。そのあとはすべてエースに託せばいい。心拍数<sup>しんぱくすう</sup>が上がるのもかまわず、ぼくは速度を上げ続けた。

あまり、急ぎすぎて、石尾さんを引き離<sup>はな</sup>してしまっはまずい。

ときどき、後ろに目をやって確認<sup>かくにん</sup>する。彼は間違<sup>まちが</sup>いなくついてきていた。

なぜだろう。ステージ優勝を決めた南信州よりも、タイムトライ

アルよりも爽快な気がした。

——おまえはそういうのが好きなんだな。

伊庭<sup>いば</sup>のことばが、ふいに頭に浮かぶ。ぼくは汗みずくになりながら笑った。

③ そうだ。ぼくはずっとこんなふうに走りたかった。

それなのに、自分を見失っていただけだ。

だんだん、距離<sup>きょり</sup>が縮まってくる。当然だ。彼らはゴールまで行くつもりで走っている。

ぼくはそのつもりはない。だから力をすべて使う。あの集団に追いついたところで、ぼくの仕事は終わりなのだから。

「いいぞ、白石」

石尾さんが後ろからそう叫ぶ。ぼくは笑って頷いた。

先頭集団のしっぽが、だんだん近づいてきた。ぼくは最後の力を振り絞<sup>しぼ</sup>った。発射台だ。

心臓が割れるようだ。もう少しで先頭集団に手が届く。

石尾さんが、横に並んだ。ぼくの肩<sup>かた</sup>を軽く叩<sup>たた</sup>き、そしてペダルに力を込め、飛び出していく。

彼が先頭集団に追いつくのが見える。ぼくは大きく息を吐<sup>は</sup>いた。

もし、カがあれば、この先も石尾さんと一緒に走り、アシストすべきだが、残念ながらそれは無理そうだ。

上がりすぎた心拍数は、すでに限界だった。

これから先はゆっくり走って、制限時間内にゴールできればいい。先頭集団はまた少しずつ離れていく。もうそれを追う理由はない。総合優勝はもう手に入らない。だが、それを悔しいとは思わなかった。<sup>④</sup>これがぼくの走りだ。<sup>⑤</sup>

幾人かの選手が、ぼくを追い抜いていく。a 力を使い切っていない選手たちだ。

少し遅れて、後ろから赤城さんと伊庭が上ってきた。b、

石尾さんのアシストとして山を得意とする赤城さんとはもかく、伊庭がここにいるというのはかなり驚きだ。上位十五人くらいには入っているだろう。

少しつらそうに顔をしかめながら、伊庭が言った。

「なんだよ、なんでこんなところにいるんだよ」

ぼくは笑った。

「もう限界だよ。ここが実力だ」

赤城さんが目でついてくるようにと合図する。やり過ぎつもりだったが、それに甘えてぼくは彼らの後ろについた。急にペダルが軽くなる。c、ひとりで走るよりもずっと楽だ。

「石尾がパンクしたと無線で聞いた。それで足を使っただろう」<sup>\*</sup>

赤城さんにそう言われて、少し驚いた。キャリアが長いだけある。

「なんだよ、リーダージャージのくせにいいかっこしやがって」<sup>⑥</sup><sup>\*</sup>

「エースは石尾さんだよ」

それははじめからわかっていることだ。いや、はじめから決められていたから、それに従ったわけではない。

彼の走りを見て、本当にそう思ったのだ。

あのとき、一瞬だけ、「行け」と言ってくれなかった石尾さんを恨んだ。

だが、すぐに思い出した。ぼくが自分で彼に言ったのだ。

自分は東京までリーダージャージを守る自信はない。このステージで勝つ自信もない、と。

石尾さんには勝つ自信がある。だから、ぼくをアシストとして使った。非情かもしれないが、チームとしてみればそれは間違いなく正しい戦略だ。

ふいに、伊庭が舌打ちをした。

ぼくの前に飛び出す。

「今、前には何人いる？」

そう聞かれて、少し戸惑う。

「たぶん、十三人くらいだと思うけど……」

「おまえ、せっかく今一位なんだから、十位以内に入れよ」

赤城さんも頷いた。

「そうだ。ステージ優勝一回、総合十位なら上出来だ」

伊庭は速度を上げて、ペダルを踏む。山は苦手なはずなのに、

d ぼくのために順位を上げようとしているのだろうか。

彼は振り返ると笑った。

「おまえ言っただろう。自由な気がするって」

たしかにそう言った。自分の勝利ではなく、だれかのために走る  
こと。それはぼくにとって、どこか自由の匂いがした。

⑦ 「だから、一度、試してみる」

ぼくは息を呑んだ。

疲労はたしかに身体からだの芯しんに蓄積ちくせきしている。だが、今彼らと一緒に  
走ったことで、少し回復したのも事実だ。

一位を狙うのは無理でも、あと数人追い抜くことならできるかも  
しれない。

息を弾はずませながら、伊庭は言った。

「おまえ、暗峠くわがりとうげで、すごい勢いで下っていっただろ」

思い出すが記憶きおくにない。あのときは、だれにも合わせず、ただ自  
分のペースで下った。そんなことは減多めったにない。さっきの下りも石  
尾さんに合わせた。

「あの速度で下れば、何人かは抜ける」

前を走っていたひとりの選手を、伊庭は追い抜いた。今度は赤城  
さんが前に出る。

ふたつめの峠の頂上が見えてくる。あそこを越えれば下り、そし  
て最後の上りだ。

ゲートをくぐる瞬間、伊庭が言った。

「行けよ」

だから、ぼくは飛び出した。

(近藤史恵『サクリファイブ』)

※メカニック……車両の整備を担当するスタッフ。

※ホイール……車輪。

※引きます……「引く」とは、空気抵抗を減らすために前を走ること。

※足を使った……「足を使う」とは、体力を消耗しょうぼうすること。

※リーダージャージ……総合一位にすることを示すジャージ。また

その選手。

※東京……ツール・ド・ジャポンの最終ステージが行われる場所。

問一 ～～～線A～Dについて、( )内の語を適切な形に直して答えなさい。

問二 ——線①について、この後に続く言葉を自分の言葉で補って答えなさい。

問三  にあてはまるものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、思いつめたように
- イ、かんでふくめるように
- ウ、あきらめたように
- エ、はきすてるように

問四 ——線②について、これはどういうことですか。四十五字以内で説明しなさい。

問五 ——線③とありますが、「ぼく」が、「見失っていた」自分を取りもどしたのはどの時ですか。最もよく表している連続した二文をぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問六 ——線④とありますが、このときの「ぼく」の気持ちはどのようなものですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、ここからは自分のペースでよいのだという解放感。
- イ、自分の役目は無事果たせたという満足感。
- ウ、精一杯力を出しつくしたという達成感。
- エ、実力の限界に気づいたことによる絶望感。

問七 ——線⑤「ぼくの走り」とはどのようなものですか。それがわかる一文を——線⑤より後からぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問八  a  s  d に入る言葉を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア、まだ
- イ、かなり
- ウ、やはり
- エ、そもそも
- オ、もともと
- カ、まさか

問九

——線⑥について、個人総合一位でありながら「いいかっこしやがって」とは、具体的にどのようなことに対して言っているのですか。四十字以内で説明しなさい。

問十

——線⑦とありますが、「試してみる」とは、具体的に、だれがどのような行動をすることですか。二十字以内で答えなさい。